

5年2組

松代焼についてもっと知りたい ～松代焼の技・文化・歴史～



松代へ校外学習に行きました

「土器をつるつるにして使えるようにしたい」という願いから、釉薬に目を向けた子どもたち。Aさんが調べてきた長野市にある松代焼を手がかりに、釉薬について調べていきました。松代焼では、松代の土を使って、灰や白土、藁灰、温泉などの自然のものを使っていることが挙げられていく中で、T君が「作っている場所に行ってみようよ。みんなで行った方がやるのがわかるんだよ。こうやるんだっていう自分の目標がわかる」と言いました。何を材料として使っているかを調べることはできますが、それをどれくらいの分量の材料が必要で、どのような過程で作っているのか。それをどうやって塗っていくのかということは書かれていませんでした。釉薬について職人さんに聞くことで自分たちが目指していく焼き物に近づけていきたいという思いがありました。

職人さんという視点が出ると、「どんな粘土使っているのか気になる」や「作品をどのように作っているかみてみたい。電動ろくろを使っているところを見てみたい」、「本焼きをしている時にはずっと見ているのかな」、「本焼きの窯は何を使っているのか」、「焼く温度はどれくらいなのか」など、職人さんに聞いてみたいことがいくつも出てきました。

子どもたちに担任がお世話になっている松代の職人さんを紹介すると、「松代行ったことある」や「松代城と真田宝物館に行った」という声もあれば、「松代ってどこにあるんだっけ」や「松代市だっけ」というようにあまり知らないという声もありました。松代のことを調べてみると「長野市にあること」や「松代城などがあり歴史のある町であること」、「松代温泉があること」などが挙げられました。すると、T君の「松代焼と松代城って関係ないんじゃない？」という言葉から、松代焼と松代城の関係性について目を向けていきました。

「僕は松代焼の歴史とかどんなふうで作っていくのか。見にいってみたい！！」(H君)

子どもたちが目指す焼き物の手がかりとなる松代焼を見つめていながら、そこにある文化や歴史などとのつながりを探るため、松代へ校外学習に行きました。今回は真田宝物館とあまかざり工房、松代焼古陶館に行ってきました。

真田宝物館では、松代焼は松代藩の殖産産業としてはじまり、鉄道の開通により一度は衰退してしまったものが人々の手によって再興され「新松代焼」として今に残っていることをお話していただきました。当時の松代焼の陶片を触らせてもらいその手触りや重さ、色などを感じました。また、松代焼とも縁が深い真田家にまつわる刀や甲冑、鉄砲などの展示物も見学しました。松代焼の歴史や松代の文化を味わう時間となりました。



あまかざり工房では、松代焼職人の宮崎さんに、松代焼のお話をしていただき、職人技の数々をみせていただきました。まずは、実際に使っている粘土を見せていただきました。松代焼の色を出すためには赤土の粘土を使っているとのこと。昔は松代で粘土を採っていたようですが、今は採ることが難しいために、違う土地の赤土の粘土を使っているそうです。その粘土を練る技をみせていただきました。まず粘土を練ることで水分を均一にして固さのムラをなくす。次に菊練りをして粘土の中の空気を抜く。傍から見たら粘土を練っているだけかもしれませんが、しかし、子どもたちはそれをじっと見つめていました。そして、「水」や「空気」という言葉が出た時に、ぴくっと体が反応したり、その言葉を逃さまいとメモしたりしていました。私たちが粘土から作品を作り、乾燥させ、焼いていく中で、何度も出合ってきた「水」や「空気」という言葉。だからこそ職人さんがみせてくださった練るという行為の中にあるすごさを感じたのかもしれませんが。

実際にろくろで制作する技もみせていただきました。先程練った粘土をろくろにのせ、右手に水をつけて粘土に添えた後、左手にも水をつけ、両手で粘土を持つとどんどん粘土が立ち上がっていききました。「やばっ」「すげえ」と感嘆の声を上げていました。そして、左手で支えながら右の手のひらで押していくとだんだんと粘土が下がっていきます。「やば。すごいでしょ。そんなこと普通できなくない？」と驚きを隠せませんでした。



そして両手で粘土を持つとまた立ち上がっていききます。「すごい。魔法みたい」と宮崎さんが粘土に命を吹き込んだように動いていることに不思議さを感じていました。「すごっ。なんで？」や「まってまってやばいよ」と子どもたちは宮崎さんの手によって粘土から器の形が表れてくる様子に釘付けになっていました。器の形がみるみるうちにお茶碗となりました。糸きりで切り離されたお茶碗が持ち上げられると「うわあー。うおー！」という歓声と拍手が自然と起こりました。子どもたちは、出来上がった茶碗を食い入るように見ていました。その次に湯呑みを作る様子を見せてくださいました。職人さんが「ある程度薄くしないと、手に持って使う食器は重くなっちゃうからね。軽く作るために薄くします」と教えてくださいました。できた湯呑を糸きりで切って実際の厚さをみせてくださいました。「うおー」「薄っ」「この前のつくったやつ結構太いよ。野焼きで焼くと割れちゃいそう」とその薄さに驚きを感じ、それを焼いたときの様子までイメージしていました。そして最後にお皿を作る様子を見せてくださいました。「いや、もう、すぐ広がっていく」「いやこわい。なんだこれ。土が生きてるみたい」「伸びてる伸びてる」「なんかだんだんと上に行ってる気がする」「やば。マジででかいお皿だ」「興奮のあまりこわくなってきた」「いや…もう…すごいよ！」とまるで生き物のように動いて、皿の形が作られていく様子に一種の怖さというか、恐ろしさというか。畏敬の念を感じているようでした。

また、釉薬に必要な材料や本焼きの温度や時間なども教えていただきました。灰と安茂里地区でとれる白土、そして藁灰を混ぜて作る松代焼の釉薬。「温度によって色が変わるんですか？」という質問すると、「低いと白っぽくなって、高いと黒っぽくなり、その中間が青色です」と温度による色の違いを教えてくださいました。「花火の色みたいだね」と炎色反応と関係づけて考えていました。1250℃という温度を聞くと、「そんな温度で本当に色が出るの?」「いやいや焼くからこそこの色が出るんじゃない」と釉薬と温度の関係性について着目をしていました。釉薬による変化には科学が潜んでいそうです。



「先生、次の時間までに赤土を準備してよ」や「電動ろくろで作ってみたい」、「先生、これで（釉薬を）作れそう」「わたしもああいうのを作ってみたい」とこれからの焼き物作りへとつながるものを宮崎さんからいただきました。

松代焼古陶館では、一度衰退してしまった松代焼を再興された方が集めた松代焼の数々を見学させていただきました。荒神町窯や代官町窯など松代焼の窯として当時栄えていた窯の種類ごとに展示されていて、窯による焼き上がりや作っているものの違いがありました。水瓶やお歯黒壺、片口など生活雑器として使われていた松代焼ですが、その大きさや色、形などに美しさを感じている様子がありました。



子どもたちはそれぞれの場所でそれぞれの学びをしていました。

「真田宝物館では、地域の人たちが協力して、昔のものを寄贈していて、地域の愛を感じました。あまかざり工房では、作り方や窯を使ったり、いろんなものがあって作り方を知れました。古陶館では、土器に釉薬を一部分だけにつけたり、いろんな形の土器や昔の土器があって面白かったです」(Rさん)

「真田宝物館では、松代焼の歴史や松代焼が一度生産が途絶えた話などを聞かせてもらいました。昔の短刀や昔のカブトなどもありました。焼き物には、色々な歴史が詰まっていたとその一つ一つの焼き物には個性があり作った人の思いが詰まっていると感じました。あまかざり工房では、昔焼き物は、緑の下の方が白という特徴がいっぱいある土器ということがわかりました。他にもろくろを操れるようになるには、3年ぐらいの年月をかけて習得することがわかりました。職人の技まるで土が活着しているかのように広がったりしていました。松代焼が残っているのは、こういう人たちがいるからこそ大切な物ということがわかりました。松代焼古陶館では、その松代焼古陶館を経営している方は、松代焼を復興した方の娘さんということがわかりました。でっかい土器を見ました。この人たちがいなければ松代焼は、いまなかったかもしれないとおもってこの人たちに、感謝したいなと思いました」(Cさん)

「真田宝物館では、色々な物とかがあって、松代焼には色々な色や、色々な特徴があるんだなと思った。それで、松代焼で色々なことをしていたんだなと思った。あまかざり工房では、職人さんが土器を実際に作っているところとか、工夫や、釉薬とかもみて、本当の松代焼は、こんなふうになっているんだなと思いました。それで、色々な作品ができるんだなと思いました。長野県には、そんなに土がないこともわかりました。聞いたことをこれから作る時に工夫して、やりたいです。松代焼古陶館では、松代焼には、特徴があって、それが全部全部違うんだなという事もわかりました。それで、古陶館で、大きな壺とか昔の窯の事とかがあって、松代焼について、よく知れたなと思いました。窯とかの技術とかがあるんだなと思いました」(K君)

松代焼から「職人の技」や「歴史」、「文化」それにかかわる「人々」を見たり、聞いたり、感じたりすることができました。今回の学びがこれからの学びにどうつながっていくのが楽しみです。